

万国博覧会と日本茶 中間報告

～パリ・アメリカで展開された日本茶喫茶店～

①万国博覧会と近代の茶の輸出振興

万博と日本茶の関りは、輸出促進だけに限られず様々な局面を持っていた。それは日本茶の持つ特性と言えよう。万博参加の目的の一つである日本を国際社会に知らしめるということに関しても、日本文化の凝縮ともいえる日本茶はその役割を大きく担った。「日本デー」やアメリカ大統領来場日「プレジデントデー」では、日本茶が来賓のもてなしの役を務めた。茶道も、日本文化の紹介と日本茶の宣伝の両面を持たされていた。そして、喫茶店で着物の女性が茶を出す優雅さは大きな話題となり、地元メディアで取り上げられ、日本のイメージに大きな影響を与えてきた。

日本の万博参加は、幕末のパリ万博(1867年)からであった。明治に入ると、茶は当時の主要な輸出品であったため、展示だけでなく呈茶によるPRも行われた。喫茶店形式であれば、飲み方を効果的に紹介できる上に、収益で経費を賄えることから、日本茶業界は「喫茶店広告」の手法を大いに活用していくこととなる。近代の日本茶輸出の中心を担った茶業組合中央会議所(現日本茶業中央会)は、明治30年からアメリカの重点地に常設喫茶店



1920年頃 現在
Jingu House Japanese Tea Garden
日本茶業中央会蔵

サンアントニオ 日本庭園内の喫茶店
神宮栄蔵(囑託通信員)はサンディエゴ万博(1915)の喫茶店運営に関わり、抹茶こそアメリカ人の嗜好に適することを報告。自身が経営するサンアントニオの喫茶店に抹茶レモネードなどをメニューに加えた。(写真左上)現在も喫茶店が復元され運営されている。
(『茶業集報第三十二号』1939)

を開設し、営業と消費者教育の場として展開させた。神宮栄蔵や榎引弓人のように万博に携わった人物が経営する常設喫茶店も重要な広告と考え、継続的に助成を行っていた。万博の日本茶庭園・喫茶店の中にはサンフランシスコのJapanese Tea Garden⁽¹⁾のように現在も活用され日本茶喫茶店が運営されている所もある。日本茶業界だけでなく、万博と日本茶の関りは広く、現在も人々に浸透していると言えよう。

今回は、中間報告として、近代の万博で展開された日本茶喫茶店の一部を紹介する。

(1)カリフォルニア冬季国際博覧会(1984)

②1867(慶応3)年パリ万博と清水卯三郎の茶店

Expositions universelles de Paris

幕末の混乱期、幕府は徳川昭武(慶喜の弟)を名代として、万博に派遣団を送った。薩摩藩と佐賀藩も出展していたが、この中で唯一の商人である清水卯三郎が茶店を開設し、最も人気を集めた。茶店は檜造りの六畳で「土間で茶を煎じ」、着物を着た芸妓三名が茶や味醂を客に供した⁽¹⁾。現地のメディアでも茶店の女性が話題となり、「日本式茶店」はたいそう人気だったと、昭武に随行していた渋沢栄一も述べている⁽²⁾。この貢献により、ナポレオン三世から卯三郎に銀メダルが授与された⁽³⁾。

卯三郎は開国後の横浜で外国商との取引もあり、薩英戦争の和平交渉の通訳を務めるほど語学力があつたため、万博での茶店の発想ができたのであろう。



パリ万博の茶店⁽⁴⁾*



イギリスの新聞報道⁽⁵⁾

(1) 青淵漁夫、霧山樵者同録『航西日記』1871。(東京大学総合図書館蔵)
(2) 『青淵回顧録』上巻p167
(3) 澤護「清水卯三郎：1867年パリ万国博をめぐって」1981
(4) 『ILLUSTRATED HISTORICAL REGISTER OF THE CENTENNIAL EXPOSITION』1867
(5) 『The Illustrated London News』No. 1455, 1867。(東京大学総合図書館蔵)

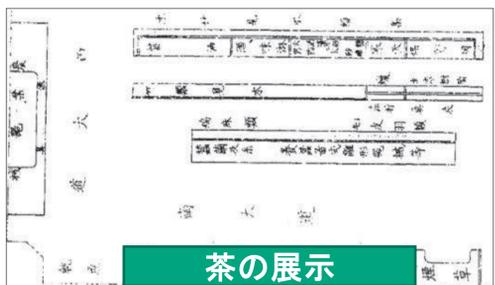
③1876(明治9)年フィラデルフィア万博と茶の展示 Centennial Exposition

アメリカ向け「日本茶の広告の始まりはフィラデルフィア万博からである」とUkersの『All About Tea』1935に記されている。しかし、喫茶店としてではなく、農業館での展示からの始まりであった。美しいイラストで茶の栽培の様子が茶樹の成長段階を示しながら紹介され、茶箱・茶壺・金属製や陶器製の茶入と、ガラスに入った見本茶がいくつも展示された⁽¹⁾。農業館の日本区では他製品よりも大きなスペースを占めていた。日本が紅茶の製造を開始するのもこの時期である。

日本館は本館と数寄屋風建築の工芸品販売店が建てられた。販売店には茶室が設けられ、茶の点前が披露されていた⁽²⁾。後に東京大学で岡倉天心の師となるフェノロサは、この万博を訪問し、日本は「驚異の宝庫だ」と感嘆している⁽³⁾。



茶室を備えた工芸品販売店⁽¹⁾*



茶の展示
農業館 日本区全体図
『国博覧会報告書 第2巻 日本出品目録』1876

(1) Frank H. 『Frank Leslie's historical register of the United States Centennial』1836-1921
(2) 三島雅博「明治期の万国博覧会日本館に関する研究」1993
(3) 國雄行『博覧会と明治の日本』2010、村形明子編『アーネスト・フェノロサ文書集成』上、2000

④1893(明治26)年シカゴ万博と日本茶喫茶店 World's Columbian Exposition

茶業界が組織(茶業組合中央会議所)で、初の海外販路拡張に乗り出したのが、このシカゴ万博の喫茶店である。「茶店概則」を設け、良質な緑茶紅茶烏龍茶を厳選し、什器備品全て純日本製とすることを定めた。「茶器も武器」とこだわり、竹の家具も好評⁽¹⁾であった。茶室での抹茶席(50c)、玉露席(25c)、普通茶席(10c)と三段階の入場料が設けられ⁽²⁾、喫茶店は「異常の好況」だったと報告されている。(『日本茶業史』)

期間中、派遣員は全米の茶商を回り営業活動や市場調査を行った。以後、万博は日本茶の重要な広告、営業、市場調査の場として活用される。

喫茶店人気：日本人だけではなく、途中から現地のスタッフも雇った。客数3,500人という日もあり、茶が足りなくなり困り果てていたところ、ヘリヤ商会が手を差し伸べ在庫を分けてくれたと報告書にある⁽³⁾。その他、大谷嘉兵衛会頭の地元茶商Corbin&Sonsへの礼状にも喫茶店の広告が有効であったことが述べられている。
(右図：Chicago History Museum蔵)
茶は川根、狭山、山城のブレンドであった⁽³⁾⁻²。



シカゴ万博の日本喫茶店
『開龍世界博覧会 美術品画譜 第三集』1894-95

日本喫茶店内装⁽¹⁾
『The world's fair as seen in one hundred days』1893



日本喫茶店全景⁽²⁾
『Official views of the World's Columbian exposition』1893

(1) Northrop 『The world's fair as seen in one hundred days』1893
(2) R.Hellyer 『Dueling Tea Rooms』2015
(3) 『茶業報告第八号』1894-95、(3)-2『茶業報告第十一号』(斎田記念館蔵)
*株式会社乃村工藝社博覧会コレクション **Babel Hathitrust *** Internet Archive

シカゴ万博1933(昭和8)年の写真帖(静岡大学蔵)

1915(大正15)年度から五か年の対米大宣伝戦を終えた日本茶業界は、次の大きな目標をシカゴ万博(A century of progress International Exposition)の喫茶店に置いた。約40坪の土地に喫茶店、別棟(約13坪)に茶室を建設し(三井家寄贈)、日系二世の女子10名、男子学生5名程度を雇い運営した。

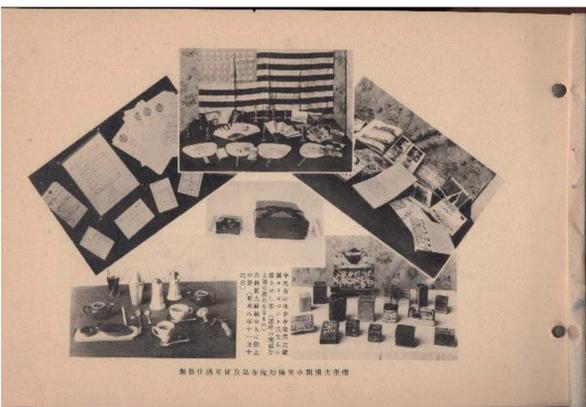
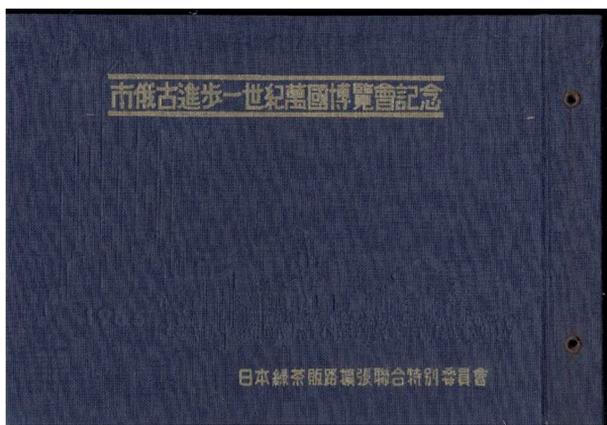
会期中の全入場者は約12万人、日本館入所者の約一割程度を占めた。夏期は抹茶アイスティーが最も人気のメニューで、アメリカンサラダやサンドイッチも提供された。価格は、フルーツアイスティー20c、煎餅付アイス/ホット・ティー10cであった。

茶道もまた、日本茶の宣伝活動に活用された。「幽玄なる茶道をもって(中略)ヤンキー連の頭を柔らげ」日本茶の宣伝になるようにと、抹茶

席は50cで薄茶を提供した。特に8月25日の日本デーにはステージデモンストレーション、各国のミスクイーンへの招待茶席など注目を集めた。

シカゴ万博の記念写真帖(下図)は、日本茶業組合中央会議所の海外宣伝用の組織である日本緑茶販路拡張総合特別委員会が取りまとめたもので、喫茶店や売店、日本デーの茶の湯接待の様子、ルーズベルト大統領夫人への献上品なども見て取れる資料である。(参考『日本茶業史 続編』1936)

当時のアメリカ人は、どのように日本茶を飲んでいたのか。
シカゴ博の報告では「元来アメリカ人の嗜好は「雑駁(ざつぱく)」で、どの種類の茶であろうと「茶には必ず砂糖やレモンをいれて呑むといふ有様で、嗜好よりも安価が最も大切な条件」— だとある。またミルクを入れて飲むことも多かったようだ。(参考『日本茶業史 続編』1936)



国内で公開される貴重な博覧会資料コレクション

外国の万博参加の記録は、残された資料が非常に限定的である。臨時的に官民の人員を派遣していることや、特に大正期に関東大震災で多くの資料が散逸したという理由がある。そうした中、博物館や博覧会の展示制作を行う株式会社乃村工藝社で所蔵する博覧会資料コレクションは、個人コレクターの資料をもとに誕生し、その後の追加収集活動を経て、2005(平成17)年からはインターネットでも公開されており、非常に貴重なものである。資料の対象内容は、国内外の万博はもとより、各種地方博覧会までを押さえている。

今回の「万博と日本茶」の研究にあたって、大阪にあるコレクションの閲覧と調査協力の機会を得た。ここに謝意を表するとともに、新たに大阪万博開催も決まり、資料への注目度と社会的意義がますます高まっていくことにも注目していきたい。



乃村工藝社「博覧会コレクションルーム」

【参考】石川敦子「博覧会資料との出会いと奮闘の記」(『日本の博覧会 別冊太陽博覧会コレクション』平凡社,2005年)
資料公開サイト <https://www.nomurakougei.co.jp/expo/> (2019.10.10現在)